

九州大学医学部熱帯医学研究会

第42期 活動企画書

2007

**Academic Society of Tropical Medicine**

**Kyushu University**

## 会長挨拶

新たな船田丸は五本の企画を立ち上げました。

定番になりつつあるインド班はわが国に乏しい「ボランティア精神」を学んで来るでしょう、そして先輩のインド班員と混じりあって医療人としての使命感を育てていくことを予感しています。さらに九大の先輩川原医師が挑戦しているスーダンにもスーダン班が編成され、日本人の「ボランティア精神」に基づく活動を体感して来ることにもなっています。

一方、今年の沖縄班は、熱研発足時以来のテーマである「ハンセン病」も学んできます。中国班も、熱研の原点とも言える二つの視点（先進国と発展途上国など）を東洋医学と西洋医学とに置き、中国ではどのように上手に両医学を利用しているかを見て来ます。

さらに今年初めての訪問国キューバにも班が編成されました。キューバ独自の医療制度と実績を見ることで新たな視点が得られるだろうことを確信しています。

以上五企画への一層のご助言・ご支援をお願いする次第であります。

熱帯医学研究会 会長  
九州大学医療システム学教室 教授  
信友 浩一

## 総務挨拶

今年度当初の部員構成を紹介しますと、医学科は6年生が1人、5年生が3人、2年生が7人、保健学科は4年生が3人という構成となっていました。このままでは部が成り立たなくなるのではと感じていたこの4月、新入生を懸命に募集したところ、幸いにも多数の入部希望がありました。そして今では総部員数が一挙に30人に到達しそうな勢いです。総務としてほっとしているところです。

「実際に現地に行き、現場を見て、聞いて、感じる」  
情報技術が発達し、世界中の情報が簡単に手に入る時代において、このような言葉はひどく泥臭く聞こえるかもしれません。しかし、たとえ非効率的でも、苦労して手に入れた情報は本人にとって、珠玉の経験となり、後々、豊かな知識の源泉となることと思います。そんな経験を今年の新入生にもしてもらいたいと思っています。

さて、今年の活動班はスーダン班、インド班、中国班、キューバ班、沖縄班となっています。これまでの先輩方が訪れた土地が多いものの、班長の多くは2年生であり、彼らにとっては上の学年の活動を参考にしながら、班長としての活動のやり方を学んでいく良い機会になるのではないのでしょうか。昨年の新入生がこうして企画を出してくれたことは本当に頼もしい限りです。

最後になりましたがこれまでと同様に、本年度も変わらぬご指導、ご支援のほどをよろしくお願いいたします。

九州大学熱帯医学研究会 総務  
九州大学 医学部医学科5年  
船田大輔

## キューバ班

活動場所：キューバ

活動期間：8月中旬から8月末日

班員：宮原敏(九州大学医学部2年)班長

花村文康(九州大学医学部2年)

活動目的：現地体験を通じて、キューバ独特の医療を学び取る。

抱負：キューバは医療先進国と言われている。しかしその実態は、日本ではほとんど知られていない。キューバはその高い医療技術と豊富な医師で、国内においては、先進国並みの平均寿命と乳児死亡率を維持している。また、キューバ人医師は世界各地に派遣され、すぐれた医療活動を行っているといわれている。今回、ポリクリニック、ファミリードクター、ラテンアメリカ医科大学をキーワードとして、事前学習および現地での体験を通じてキューバのユニークな医療体制を学び、今後に生かしていきたいとおもいます。

## インド班

活動場所：インド

活動期間：8月

班員：渡邊 智子（九州大学医学部保健学科3年）班長

現在、班員を募集しています。

活動目的：・インドにあるマザーテレサの「死を待つ人の家」など4つの施設に行き、患者さんの身の回りの世話や治療の手伝いといったボランティアを体験することでマザーテレサの信念を理解し、患者さんとの接し方、発展途上国の医療の現状について学ぶ。

・孤児、病人、障害者などと接することによって自分自身をみつめ直し、相手が何を求め何を感じているのか、自分に何ができるのか等を考え、将来の医療職者としてのあり方を考えるきっかけとする。

・感染症の宝庫といわれるインドで、コレラ、ジフテリア、破傷風、HIV 病棟などを訪れる。

抱負：インドでの活動を通して、発展途上国の医療の現状や感染症について学び、その中で私たち学生に出来ることはどのようなことなのかを考え、将来に生かしたいと思います。

## 中国班

活動場所：中国（北京、南京など）

活動期間：8月上旬（1～2週間程度）

班員：前園 明寛（九州大学医学部医学科2年） 班長  
現在、班員を募集しています。

活動目的：現地の大学や病院をまわり、長い歴史のある東洋医学を視察する。そして、東洋医学を西洋医学に生かす将来性を考える。

抱負：昨今、「統合医療」という言葉を聴く機会が多くなった。東洋医学は、西洋医学より長い歴史をもつ。そこには、長年培われた偉大な先人の知恵が存在する。将来的に、西洋医学と東洋医学の垣根をなくした治療が必要となる。よって、学生という早期に、実際に現地に赴き、漢方や鍼灸等の東洋医学の世界を体験することは大変有意義なことだと思う。そして、統合医療の観点から、今後の日本の医療を考えたい。

## 沖繩班

活動場所：沖繩

活動期間：8月中旬

班員：田川直樹(九州大学医学部2年)

現在、班員を募集しています。

活動目的：沖繩の離島における医療を見学するとともに、沖繩本島における離島医療支援体制を学び、離島医療を体験する。また、宮古南静園研修に参加し、ハンセン病について学ぶ。

抱負：私たちの周りには、専門医がそろった総合病院がいくつもあり、ほとんどの症例はその病院で治療を受けることが可能である。しかし、沖繩における医療サービスの水準はわれわれのそれと大きく異なっている。沖繩の離島では、その島内で診察できる症例が限定されており、急性期症例の患者はヘリで搬送するものの、病院への到着まで時間がかかってしまう。沖繩の離島医療の現状を体験し、離島医療に対する理解を深める。

また、順天堂大学の主催する宮古南静園研修に参加し、療養施設の見学などを通してハンセン病について知る。